

1 事業名 ボランティア活動入門セミナー

2 必要性

「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」（中央教育審議会答申・平成14年7月29日）を踏まえ、青少年がボランティア精神を育み、生涯を通じて様々な場面でボランティアとして活躍できる人材を育成する必要性は従来から指摘されている。多くの青少年が、ボランティア活動を通して、社会にとって有用な人材として活躍するための支援をすることは、青少年教育施設の使命である。

また、ボランティア活動に参加する青少年の活躍の機会を広げ、あらゆる活動の中でリーダーシップを発揮しながら活躍できる青少年を育成する事業は、社会からの要請があるところである。本事業は国立青少年教育施設が有する機能を最大限に活かし、青少年にボランティア活動に関する学習の機会を提供するものであり、主体的に社会に参画しようとする態度を養成するものである。

3 趣旨

ボランティア活動を始めようとする青少年に、ボランティアについての学びの場を提供することで、ボランティア精神を育むとともに、社会の様々な場面で主体的に活動することのできる人格の形成に資する。

4 後援

島根大学、島根県立大学

5 期日

平成24年5月11日（金）～5月13日（日）

6 参加者

- (1) 募集対象・人数 ボランティア活動に興味関心のある大学生・青少年 30名
- (2) 参加人数 57名（左記以外にボランティアスタッフ11名の参加）
- (3) 参加者分析 大学生・青少年30名の募集に対して、定員を大幅に超える57名の参加があった。その内訳は、下表のとおりである。参加者の本事業への参加のきっかけは、各大学で実施した説明会での説明を聞いて興味を持ったことが大半であり、「友人・知人に誘われて」参加した参加者も多かった。

| 所属 | 人数 | 合計 |
|----------------------|-----|-----|
| 島根大学教育学部 | 43名 | 57名 |
| 島根県立大学短期大学部（出雲キャンパス） | 12名 | |
| 島根県立大学短期大学部（浜田キャンパス） | 2名 | |

- (4) 参加地域 島根県54名 鳥取県3名

7 講師等

松岡 広路 氏（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）
飯塚 幸夫 氏（出雲市消防本部警防課）他3名

8 参加経費 3,400 円

9 事業の内容

(1) 事業の特色

本事業は、ボランティア養成の入門編に位置づけ、人間関係能力・コミュニケーション能力などのソフトスキルや野外炊飯の安全管理や指導法等のハードスキルなど、ボランティア活動を実施する際に求められる基礎基本となる事項を学ぶ機会を提供するものである。また、国立青少年教育振興機構の法人ボランティア養成共通カリキュラムとして実施し、今後当施設でボランティア活動を希望する者に対して、法人ボランティア登録の機会を提供するものである。さらに、現在登録している法人ボランティアに事業運営の補助を担ってもらうことで活躍の場を提供し、ボランティア活動に携わる技術や意識の向上を図る。プログラム構成については、10月に実施する教育事業「さんべ祭」の企画・運営やその他の教育事業の運営補助などの活動に繋がるよう工夫した。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

今回のプログラム構成のねらいとして、①ボランティア活動の基礎基本の学習、②今後の活動の基本となるボランティアネットワーク形成、③具体的なプログラムの知識・技術の獲得の3つを位置づけた。参加者が57名と多い中、より効果的に学びを深めることができるようにグループ単位での活動を多く設定し、各グループに先輩ボランティアを1名ずつ配置した。また、先輩ボランティアの指導する機会を多く設定することで、参加者に当施設でのボランティア活動をイメージしてもらえようとした。さらに、参加者に対する指導は、先輩ボランティアにとっても、個人のスキルアップにつながる機会であると考え、参加者、ボランティアの双方に学びがあるプログラムとした。

平成24年4月に実施した「ボランティア集会」の際に、先輩ボランティアから「三瓶でのボランティア活動の楽しさを参加者のみんなに伝えたい!」、「今後引き続き三瓶で活動して行ってほしい!」という自発的な声があがり、プログラムの一部を先輩ボランティアに委ね、企画・運営してもらった。

平成23年度にも同様の事業を実施しており、プログラムの流れや時間配分などスムーズに実施できたため、今年度も同様のプログラム構成で実施した。

1日目・2日目は、体験を通して学び、最終日に「青少年教育の理解」「ボランティア活動の意義」のコマを講師に依頼することで、2日間の活動をふりかえりながらボランティア活動の概要を学べるように意識した。

なお、本事業は文部科学省がすすめる自然体験活動指導者の補助指導者を養成する事業とし、補助指導者の養成カリキュラムも勘案し実施した。

(3) 広報のポイント

島根県内の大学が実施するボランティア活動等に関する説明会に出向き事業への参加を促した。また、島根県内および広島県内の大学・専門学校に要項を配付し、設置してもらった。説明会では当施設職員の他に先輩ボランティアにも参加してもらうことで、説明会に参加した学生は直接具体的な話を聞くことができたと考えられる。さらに、今後のボランティア活動に計画的に参加できるように、当施設が募集する年間のボランティア活動を記載したチラシを作成し、配付したことによって参加者が増加した要因であったと考えられる。

(4) 日程表

| | | | | | | |
|----------------|-----------------|---------------------------------------|-------------|--|-----------------|--------------------------------|
| 5 / 1 1 (金) | 20:00 20:30 | | 21:00 | | 22:00 23:00 | |
| | | 受付 | オープニング | 青少年教育施設の現状と課題 「交流の家ってどんなところ？」 「心と心をつなぐアイスブレイク」 | | 入浴 就寝 |
| 5 / 1 2 (土) | 6:30 9:00 | 12:00 14:00 | 17:00 19:30 | 21:00 23:00 | | |
| | 起床 つどい 朝食 | 救命救急法 「野外で大切な 人を守るために」 | 昼食 | プログラム体験① 「竹を使った バウムクーヘン作り」 | つどい 入浴 夕食 | プログラム体験② 「火をともし キャンドル体験」 |
| 5 / 1 3 (日) | 6:30 9:00 | | 12:00 13:00 | | 16:00 | |
| | 起床 つどい 朝食 | 青少年教育の理解 ボランティア活動の意義 講師：松岡 広路 氏 | 昼食 | 青少年教育施設におけるボランティア活動の理解 「さんボラ体験記」「ふりかえり」 クロージング | | 解散 |

(5) 内容及び講師

① 講義・演習「青少年教育の理解」

神戸大学 松岡 広路 氏

・学校教育法や各種調査研究の報告を基に、青少年の生活習慣の乱れや体験活動の必要性について説明した。

② 講義・演習「ボランティア活動の意義」

神戸大学 松岡 広路 氏

・ブレインストーミング法や東日本大震災で講師が実際にボランティアとして支援した様子の映像などを用いて、グループごとに「ボランティア活動とは？」について考え、全体でその考えを共有した。



松岡先生の講義「ボランティア活動とは？」



参加者全員で記念撮影

③ 講義・実習「青少年教育施設の現状と運営」

国立三瓶青少年交流の家 藤江 龍

・当施設で実施しているスライドを用いたオリエンテーションの実施や朝夕のつどいへ参加することで、青少年教育施設の役割・運営について説明を行った。



朝のつどいで司会を担当！



「交流の家ってどんなところ？」



レクリエーション「もしもしカメよ」

④演習「青少年教育施設におけるボランティア活動の理解」 国立三瓶青少年交流の家 藤江 龍

- ・当施設の実施する教育事業についてスライドを用いたり、先輩ボランティアの体験談を話したりすることで説明を行った。
- ・国立青少年教育振興機構の法人ボランティア制度について、登録の流れや手続き、待遇等の説明を行った。

⑤活動スキル実習「救命救急法」

出雲市消防本部 飯塚 幸夫 氏

- ・人体模型を用いて、AEDの使用も含む心肺蘇生法を4つのグループに分かれて実施した。



講義「大切な人を守るために」



救命救急法「心肺蘇生法の実践」



救命救急法「AEDを用いた応急手当」

⑥活動スキル実習「野外炊飯」

国立三瓶青少年交流の家 渡邊 絵里子

- ・安全管理や環境問題を意識しながら、当施設で提供している活動プログラム「バウムクーヘン作り」を8つのグループに分かれて実施した。



バウムクーヘン手順説明



プログラム体験「バウムクーヘン作り」



バウムクーヘン完成！

⑦活動スキル実習「キャンドルのつどい」

国立三瓶青少年交流の家 藤江 龍

- ・先輩ボランティアが企画した活動やレクリエーションゲームを実施した。



先輩ボラ企画「2枚の写真」



プログラム体験「キャンドルのつどい」



(6) 運営のポイント

参加者が多く、一人一人のねらい（目標）を全体で共有したり、ふりかえりをしたりする時間が十分に確保できないことが予想されたため、ねらいなどを一人一人が画用紙に記入し、掲示することで他の参加者や先輩ボランティアの思いを共有できるようにした。

事業全体を通して参加者同士や参加者と先輩ボランティアの関わりを重視し、生活面については先輩ボランティアが指示、指導するようにした。グループ編成の際は、できる限り他の大学や初対面の者同士が同一グループになるように編成し、グループ毎に先輩ボランティアを配置するなど、コミュニケーションが図れるように配慮した。職員は参加者の安全管理、健康管理に努めた。

(7) 安全管理のポイント

所外での活動については、事前に活動場所の踏査を行い、安全確認を行った。また、野外炊飯の活動では刃物や火気の使用には十分に注意を払いながら指導した。さらに参加者に対して朝夕のつどいで健康状態の確認を行った。

(8) アンケートの満足度・主な記述

満足度（参加者 57 名中） 満足 49 名（86.0%） やや満足 7 名（12.3%） やや不満 1 名（1.7%）

- ・ 楽しくボランティアについて学ぶことができた。
- ・ たくさんの人と交流できてよかった。
- ・ 先輩ボランティアや他大学の参加者との交流が深まった。
- ・ 新たな発見の連続で自分の成長の糧になった。
- ・ とても有意義な活動であった。全体指導者の資格も取りたい。
- ・ 今後は様々な事業に参加して、特別支援の子どもなど様々な人と触れ合い、自分の人間性を深めていきたい。

10 成果と今後の課題

<成果>

- 募集人数を大きく上回る 57 名の参加者全員が法人ボランティア登録をした。また、大半の参加者が自然体験活動指導者の補助指導者に登録した。
- 今回は島根県立大学出雲キャンパスから 12 名、浜田キャンパスから 2 名の参加者があり、平成 23 年度に引き続き 2 大学 3 キャンパスの学生が中心となり、連携しながら活動に参画してもらえることが期待できる。
- 参加者に実施したアンケートによると、「新たな発見の連続で自分の成長の糧になった。」や「今後は様々な事業に参加して、特別支援の子どもなど様々な人と触れ合い、自分の人間性を深めていきたい。」などの前向きな意見が数多くあり、今回の事業はボランティア活動についてのイメージを持たせ、これについて改めて考えるきっかけを提供できた。
- 本事業の 1 コマを先輩ボランティアが企画・運営した。この経験が先輩ボランティアに対しても学びの機会の提供となった。

<課題>

- 募集人数 30 名に対して倍近くとなる 57 名の参加申込みがあった。本事業は参加者からの需要が大きいものであり、平成 25 年度以降は実施を二度に分けるなどの工夫も求められる。

- 平成 23 年度に引き続いて本事業への参加者が多かったことから、昨年度から継続して法人ボランティア登録している者も含めると登録者数が大幅に増加した。このため、今後法人ボランティアが当施設で実施するボランティア活動に継続的且つ積極的に参加できるよう、活動機会の新規設定やボランティア募集方法の改善を行う必要がある。
- 複数の大学（キャンパス）の学生が法人ボランティア登録をしている状況に対して、当施設職員が仲介役となり、ボランティア同士のネットワークを整備する必要がある。

11 普及計画・普及実績

島根県内の新聞社・テレビ局等の報道機関に広報した結果、地方新聞 1 社および大田市と出雲市のケーブルテレビが事業の一部を取材後に報道し、事業の普及となった。またホームページ上に要項や事業の様子などを掲載することで事業内容を社会に広く周知することができた。

また、年間のボランティア活動を記載したチラシを、平成 24 年度教育事業青少年教育指導者等の養成・研修事業「青少年教育指導者ミーティング」において配付・説明することで、公立施設へのボランティア募集に関する手法の普及にもなったと考える。

(担当 藤江 龍)